2023年5月21日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

ただ神の前に誠実に

［ローマの信徒への手紙7：15～25節］

わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。 「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えていますが、肉では罪の法則に仕えているのです。

[1] ある人生相談の記事から

　牧師という仕事は、やってみて、思ったより大変で決して楽ではないなぁと思ったりすることがあります。いきなりそんなことをここで言うのはどうかと思われる方もおられるかと思いますが、申し訳ありません、これも今日のメッセージの一部だと思って聞いて頂ければと思います。

　牧師の仕事は何が難しくてしんどいのか。それは色々ありますが、でもこうも言えると思います。それは、しんどくないような牧師の仕事をしているとしたら、もはや牧師の仕事じゃないのではないか、と。メッセージをここで毎週のようにさせて頂きますけれども、一番楽ではない、葛藤させられるのは、言葉のリアリティーということです。言葉が自分と乖離していないかどうかということです。時々説教者は断定的な物の言い方をします。「〇〇なのであります」とか「神様の思いはこうなのです」とかそういう断定的な響きです。自分は何様なのだろうか、と思うことがあります。牧師や神父というのは、神様の代理でもなんでもありませんよね。神様に使われているだけです。そのような者が皆の前で「これが主の思いです」と語らねばならない、それは不可能をやっているのです。聖書をまるで自分が書いたかのように語るなんていうのはとんでもないことです。ですから当たり前ですが、信徒の皆さんは牧師を奉ってはいけないし、牧師は自分が神に代わるような者であるかの如く思ったら傲慢も甚だしいことになります。しかしそれでも、何かを語るとなると、どこか上からの物言いのようになってしまっていることに気が付かされ、本当にジレンマを感じ、嫌になることがあります。

　そんなことを思っている中、私は最近、新聞の人生相談のコラムを読んでいて、ああ、本当にそうだなあと思ったのです。それは詩人の伊藤比呂美さんがお答えをしているものなのですけれども、質問者は50代の女性です。会社で一緒に仕事している同僚がいささか自分勝手な所があって今一つ信用できなくて困っているという質問なのです。それに対して、伊藤比呂美さんはこのようなことを述べています。―「私たちは大抵、人というのは裏表のないのがいいと思っています。それが正直で誠実な生き方だと思っているから。それであなたも今一つ信用できない人とも真正直に付き合って折り合いをつけてゆきたいと持っているようですが、そんなことまでしなくて良いのでは」というようなことを言うのです。一瞬エッ？と思います。そしてこのようなことを言うのですね。―「私たちは一つの人格でずっと通すわけじゃなく、通せるわけじゃなく、場面場面で態度や話し方が変わるし、変わって当然です。私たちは皆どこか仮面を持っている。とても分厚い仮面を被ることもあれば、殆ど素に近い仮面もあるけれど。職場での自分、隣人の自分、生徒としての自分、親の前でも“子供”という仮面を被っている。友人によっても私たちは異なる仮面を被る。あなたもそうでしょう。それは良い悪いではない。あなたの会社の調子のいい者も、良い面、悪い面、色んな面があるんだと考えて、ある時は信用して相談したらよいし、時には困ったもんだと思ってやり過ごせばよいのでは。筋は通っていないかもしれないけれど、そもそも人間はそんなもの」と。皆さんはどう思われますでしょうか？私は、何かつっかかっていた小石が、小川の流れに乗って転がっていくような気持ち良さを覚えてしまいました。伊藤さんが言われていることは、変に頑張ってその人の身勝手な態度に振り回される必要はないのでは…。仮面を被っている者同士、良い具合に付き合いなさい、と言っているのです。これは、まあ処世訓ですね。お互いの破れも受け止めながらゆるく付き合ってゆく、そんな、生きて行く知恵のようなもので、私たちはそのようなことでお互い生きている所があると思います。それはよく言えば「思いやり」です。「寛容さ」です。

[2] 使徒パウロの礼拝の言葉

ところが、信仰の世界は、「黒か白か」になり易い。ここが要注意です。今日の「ローマの信徒への手紙」の聖書箇所は有名な箇所ですが、書いた人は使徒パウロです。彼はかつてはユダヤ教徒として、自分は絶対的信仰者、周りの者は不信仰者だと、黒白つけて生きてきました。それが神様の掟・律法に従って生きることだと信じてきました。しかし今、彼は自分の内面を見つめて嘆いているのですね。21節以下にこうあります。―「善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。」 ―今彼は、自分の心が単純でないことを知りました。これ迄は黒白を付ける生き方で、他者を、キリスト者たちを迫害してきた。使徒言行録を見ると、息を弾ませながらやっていたというのですから、喜んで迫害をしていたのでしょう。しかし今彼は、真の神のことば、キリストの光に打たれたのです。彼が呪っていた十字架が付きつけられました。あの十字架の上で敵を赦しながら、父なる神に祈りながら死んでいったキリストが内に迫ってきた。その時に彼は自分の真相に気付いたのです。21節に「善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます」とあるように「気づいた」。これは、解放です！彼は初めて自分の内側を、闇を覗き込むことが出来るようになった。それは他でもない、自分が神様に赦されているこということを知ったからです。それを知らないと、私たちは裁き合ってしまうのです。黒白をつける「やいば」を他者に、また自分自身に当ててしまいます。主イエスは、あなたはそうあってはならない！と私たちに声をかけているのです。

本日、招きの聖句で読んで頂いた主の言葉です。―「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」 (マタイ10:29～31)。私たちの命は、存在は、神様に覚えられているのです。自分で自分を全部把握しているというのは、責任感があるようでいて、神様の前に誠実な態度ではないのではないでしょうか。なぜなら、私たちは自分の髪の毛一本も自分では数えられない。しかし神様は一本残らず数えておられると。私のこの存在の責任を取り、愛して下さっているのは、神様なのだ！と主は言っておられるのです。

「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。」 …私たちは時に、自分の悪になびく心を、他のせいに致します。曰く「環境が悪いのだ」「時代が、政治が悪いのだ」。しかしパウロは自分のダメダメな心を環境のせいにしません。時代のせいにしません。自分自身が本当に新しくされなければいけないのだと！それを、主イエスを仰ぎながら叫んでいるのですね。私たちは、どこかで誤魔化しながら生きている所があると思います。それは生活の知恵です。最初に引用した人生相談のように。しかし、自分に絶望した時はどうでしょうか…？ 私たち人間には、深い淵から叫び祈る声を聞き取って下さるお方がいらっしゃるのです！この方の光に晒されて、温められて、私たちは自分の絶望さえも担って下さる方に全くお委ねして良いのだと思います。それをパウロは、身をもって私たちに示して下さっているのだと思います。この言葉は、いわゆる言葉が乖離した“お説教”ではなく、生身のパウロの存在の告白、礼拝の言葉だと思います。―「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」 お祈り致します。

　主なる神様、今日のみ言葉が私たちの内側に深く迫ってきます。私たちは本当に自分の惨めさを分かっているのでしょうか？最も分かって下さるお方、その方が主キリストなのだと思います。私の小さな罪、大きな罪、気付いている罪、また気付いていない罪、それを皆あなたは背負って十字架で背負いきって下さいました。そのあなたの大きな赦しと受容の中で、私たちは自分自身とこの世界を愛する者へと導かれていることを思います。どうぞ、聖霊なる神様、私たちを日ごとに新しくして下さい。様々な困難が押し寄せてくる中で励まし、あなたの前に誠実に生きる者として下さい。主イエスのお名前によって。アーメン。